



第17回植物園シンポジウム  
ふるさとの植物を守ろう

# ナショナルコレクション

## 貴重な日本の植物を後世に伝える

日時 2019年11月10日(日)12:45~16:15

会場 新宿御苑インフォメーションセンター・レクチャールーム

主催 公益社団法人 日本植物園協会

後援 環境省自然環境局 新宿御苑管理事務所

### 第1部 認定コレクション紹介と活動報告

「武田薬品京都薬用植物園命名ツバキ品種群」

武田薬品工業株式会社京都薬用植物園 小島 正明

「神代植物公園サクラソウ品種コレクション」

公益財団法人東京都公園協会 神代植物公園 園長 飯田 有貴夫

「巨椋池（おぐらいけ）由来のハス」

公益財団法人宇治市公園公社 宇治市植物公園 柳 明宏

「植物と植物文化を保全する」

日本植物園協会名誉会員・さくらそう会世話人代表 鳥居 恒夫

### 第2部 皇室の伝統園芸を受け継ぐ「新宿御苑菊花壇」見学会

本シンポジウムは公益財団法人山口育英奨学会 自然環境保護活動助成事業の助成を受けて開催されます



# 日本植物園協会ナショナルコレクション認定制度

ナショナルコレクション委員会 委員長 新潟県立植物園 園長 倉重祐二

日本には6,700種を超える植物が自生し、そのうちの約1,800種が日本固有の植物です。一方で日本人は、野生植物や海外から持ち込んだ植物を選抜あるいは育種し、数多くの有用植物や観賞植物を作り出してきました。しかし現在では、日本の野生植物の約1/4が絶滅危惧種に指定されるとともに、これまで作出された栽培品種の多くも失われつつあります。

日本植物園協会では、2006年から日本の絶滅危惧植物の生息域外保全を目的とした「植物多様性保全拠点園ネットワーク事業」を開始し、現在までに絶滅危惧種の66%(1,182種)を収集、保全し、一定の成果をあげてきました。

一方、長い歴史を誇る、生きた文化財とも言える日本独自の園芸植物、ツバキやツツジ、ボタン、カエデ等々、江戸時代より綿々と続いてきた日本独自の園芸植物は、多くは失われてしまったと考えられますが、その栽培の実態も把握されていないのが現状です。

生きた文化財ともいえる園芸植物が、何が存在したかも知られることなく消えるのは、人類にとって非常に大きな損失と言ってもオーバーではないかもしれません。特に伝統園芸植物は、栽培が難しい種類が多く、保存基盤が個人や愛好会などに限定されていることが多いため、早急に保全の必要があると考えられます。

このような状況に鑑み、日本植物園協会では、2014年から外部有識者を加えて検討をはじめ、翌年にはイギリスのナショナル・プラント・コレクションの事業運営や認定状況の調査を行い、2017年より「野生種、栽培種に関わらず、日本で栽培されている文化財、遺伝資源として貴重な植物を守り後世に伝



菊大作り花壇（環境省新宿御苑管理事務所）

えていく」ことを目的とした、包括的な植物保全システム「ナショナルコレクション認定制度」を開始しました。本制度は、個人や愛好団体など保全基盤の脆弱な植物コレクションであっても申請が可能な、日本で



古典園芸植物  
江戸時代後期に人気を博したマツバラ

唯一の保全システムです。認定によって、コレクションの社会的価値が高められ、特性や栽培情報によりに関する情報が

共有され、存続が危ぶまれる際の他への橋渡しがされることで、コレクションが永続的に保全されることが期待できます。

本シンポジウムでは、これまでに認定されたコレクションをはじめとする貴重な植物やその利用、また植物文化の保全についてご紹介いたします。これを機会に、皆様にナショナルコレクション認定制度と保全の意義をご理解いただき、我が国の貴重な植物を共に守っていただけると願っております。

※ナショナルコレクション認定制度の概要や申請については、日本植物園協会ホームページをご覧ください。

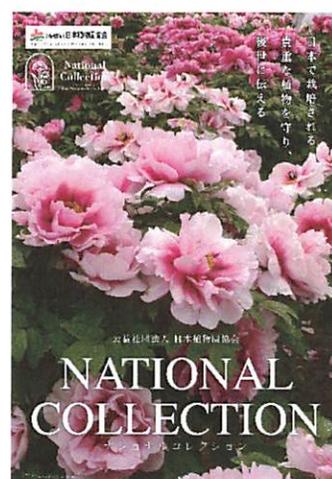


イギリスのナショナル・プラント・コレクション。マールウッド・ヒル・ガーデンズの Astilbe (チダケサシ属)

認定 1 号 武田薬品京都薬用植物園命名ツバキ品種群  
武田薬品工業株式会社 京都薬用植物園(京都府)

認定 2 号 神代植物公園サクラソウ品種コレクション  
公益財団法人東京都公園協会 神代植物公園サービスセンター(東京都)

認定 3 号 巨椋池(おぐらいけ)由来のハス  
宇治市植物公園(京都府)



ツバキ'浄立寺'  
(武田薬品工業(株)京都薬用植物園)



サクラソウ'隠れ蓑'  
(神代植物公園)



ハス'妙蓮寺'(宇治市植物公園)

### 植物園協会会員以外からの申請受付開始

今年 8 月から植物園協会以外の個人、団体からもナショナルコレクションの申請を受け付けています。本制度の概要、申請書のダウンロード等については、植物園協会ホームページをご覧ください。皆様の申請をお待ちしております。

<http://www.syokubutsuen-kyokai.jp/nc/>



# ナショナルコレクションに認定された 「武田薬品京都薬用植物園命名ツバキ品種群」の紹介

武田薬品工業株式会社 京都薬用植物園 小島正明

京都薬用植物園で保有するツバキ系統は、当社六代武田長兵衛が1956年にハワイの知人のもとを訪れた際、日本に自生するユキツバキの分譲を依頼されたことを契機に収集が開始されました。収集されたツバキ系統の保存場所として、園内南西部にある山地の麓から頂上にわたってツバキ園が造成され、現在では約1haの敷地面積に577品種が植栽展示されています。植栽展示品種の内訳は、国内で作出された355品種、当園で命名した155品種および外国から導入した67品種となっています。

当園で命名した155品種は、1956年から1960年にかけて北は山形県から南は沖縄県の17府県から収集された系統で、お茶の水女子大学教授津山尚理学博士により既存品種とは異なる形質をもつことが明らかにされました。これら新しい形質をもつ155品種に対して当園で品種名がつけられ、品種の特性等については津山尚理学博士編著の『日本の椿』\*にまとめられています。当園で命名した155品種のうち、来歴が明確な121品種について日本植物園協会のナショナルコレクション認定制度に申請し、2018年6月19日に認定を受けました。

ナショナルコレクションに認定された品種の導入元を府

県別に見ると、ユキツバキ系品種を導入した富山県、石川県、新潟県の順で多く、これら3県で91品種が収集されました。次いで京都府で10品種が収集されました。この中には都市開発から救出することを目的に、当園に移植された、伏見桃山の武家屋敷に伝わる推定樹齢200年以上とされる古木(後に‘桃山’、‘修学院’と命名される)も含まれています。以下、13府県で原木や原木の穂木の形態で20品種が集められました。121品種を花色別に見ると、紅色系が最も多く61品種、桃色系が32品種、白色系が15品種そして絞り系が13品種となっています。花形で大別すると、一重咲きが最も多く39品種、次いで八重咲きが32品種、唐子ならびに獅子咲きが25品種、二重咲きが14品種、千重咲きが9品種、宝珠咲きが2品種という構成になります。

現在では新たなツバキの収集については行っておらず、これまで収集した品種を維持管理するとともに健全に育成する施策を実施しています。今後も、遺伝資源としてツバキの品種を後世に残していくことが、当園に課せられた大切な役割であると考えます。

\*津山尚(1969)日本の椿. 武田科学振興財団. 大阪



ナショナルコレクションに認定された品種「修学院」



椿園の歴史を物語る多種多様な品種

# 神代植物公園サクラソウ品種コレクション その概要と取組状況

公益財団法人東京都公園協会 神代植物公園 園長 飯田有貴夫

## ■申請の背景

神代植物公園は、昭和36年の開園以来、多くの園芸植物、とりわけ江戸時代を中心に作出された伝統園芸植物の収集と展示に注力してきた。中でも、サクラソウ(*Primula sieboldii*)は江戸の地に生えた野草から江戸の人たちが育て上げた唯一の園芸草花で、まさに江戸の花といえる。このことから、当園では、展示協賛団体の一つである「さくらそう会(世話人代表:鳥居恒夫氏)」と連携し、サクラソウ品種の収集保存と展示普及に特に力をいれ取り組んでいる。

## ■認定コレクションの概要

神代植物公園サクラソウ品種コレクションは、さくらそう会が認定している322品種のうちの293品種(91%)で、現在知られているサクラソウ品種の大半を保有・栽培しており、今回ナショナルコレクション認定の主たる理由となっている。また、コレクションは、現存する最古の品種といわれる「南京小桜」をはじめとして、江戸時代の作出とされる品種が54%を占め、現存する江戸時代の品種に限ればそのほとんど(98%)を保有している。

## ■栽培状況と品種管理

1品種につき原則2鉢ずつを圃場にて栽培管理しており、担当職員を定め、日々の灌水や植替えなど作業量が多い場合は、他の職員やさくらそう会メンバーと協力し作業を行ってきた。また、ラベル表示を厳密に行い、開花期には同会の協力のもと品種名の照合を行うことで品種管理に正確を期している。



現存する最古の品種「南京小桜」



圃場での管理状況



展示会と解説ガイド

## ■展示等の普及啓発、栽培文化の保存継承

毎年4月には、さくらそう会による展示会に合わせ、当園で栽培した開花株を屋外の特設展示場で公開してきた。展示期間中は、同会会員が中心となり来園者へ解説ガイドや講演会を随時行うとともに、冬季にはサクラソウの植替え教室を開催する等、品種紹介と栽培方法の普及啓発に努めている。

サクラソウ園芸は、江戸時代の「連」と呼ばれる愛好家の会の結成と品評会の開催、謡(うたい)に因むといわれる優雅な品種名の命名、独特の色合いの鉢を用いた栽培方法や「さくらそう花壇」と呼ばれるひな壇式の展示鑑賞技法の確立等、様々な文化的側面を併せもつ。展示会や講演会ではこれらの話題を紹介し好評を得ており、単にサクラソウの品種保存だけでなく、普及啓発を通じ伝統園芸文化の継承に寄与していることも今回認定の一因となっている。

## ■認定の意義と今後の展望

今回のナショナルコレクション認定を通じ、保有サクラソウ品種のコレクションとしての価値が内外に明らかとなり、事業効果を高めるとともに、関係各所からの問い合わせも増え、植物園としてステータスや担当職員のモチベーション向上に繋がったと感じている。

江戸由来の多くの品種が現存しているのは、サクラソウを連綿と栽培してきた愛好家の方たちの熱意と努力の賜物といえる。今後も、植物園と人とのつながりを大切にするとともに、ナショナルコレクションの肩書を生かし、伝統園芸植物とその文化を次世代に継承していきたい。

# 巨椋池（おぐらいけ）由来のハス

公益財団法人宇治市公園公社 宇治市植物公園 柳 明宏

宇治市植物公園は京都府南部の宇治茶と平等院で知られている宇治市の南西部の丘陵地にあり 1996 年に開園しました。地域の植物として当園の保有する「巨椋池由来のハス」が昨年 12 月にナショナルコレクション第 3 号として認定されました。

巨椋池は時代によっては大池や大椋大池などによばれており、宇治市、京都市伏見区、久御山町の 3 地域にかけて広がる面積約 800ha の大きな池でした。北は桂川、南は木津川、東は宇治川が流れ込む合流地点で一般的に想像する池ではなく水量によって大きく形が変わる遊水地でした。国内産水草の 80% 余りが生育する水生植物の宝庫でしたが、1933 年から 1941 年にかけて国営干拓事業の第 1 号として農地へと姿を変えました。

巨椋池にいつ頃からハスが生育していたかは不明ですが、久御山町に伝わる話に、用明天皇（在位 585～587 年）がハスを読んだ御歌が登場しています。江戸時代から昭和にかけての文献にはハスの名所として巨椋池が紹介され著名な文人などがハスを楽しんだ記述があります。

巨椋池のハスの品種は内田又夫氏（1922～2005 年）と西村金治氏（1915～2010 年）の両氏によって現在に残っているといっても過言ではありません。内田氏が幼少期に遊んだ巨椋池を懐かしみ、1970 年頃から干拓され農地になった、かつての巨椋池を巡り、幼芽などの採取を始めました。西村氏は 1977 年に内田氏の活動を新聞で知り、それをきっかけに一緒に活動を始め、巨椋池に咲いていたハスの保存や普及など目的とした「京都花蓮研究会」を発足

せました。両氏が中心に収集し、栽培した巨椋池由来のハスは 100 品種を超

え、花色は、白、紅、爪紅、桃、斑とあり、花形も一重や八重があり変異に富んでいます。しかし、現在なくなってしまった品種もあるため京都花蓮研究会では 92 品種を巨椋池由来のハスとしています。

当園では巨椋池の地元にある植物園として 1999 年より、京都花蓮研究会や巨椋池土地改良区からレンコンを分譲していただき、徐々に品種数、鉢数を増やし、現在では 62 品種を栽培展示しています。ハスは毎年 3 月の彼岸頃から 1～2 週間をかけて植え替えを行っています。ここでは品種が混ざらないように注意を払いながら、ラベルのチェックや更新を行っています。開花時には品種の確認を行い、わからないものについては京都花蓮研究会の協力のもと品種を確認しています。また、花が散った後の果托は摘み取り交雑した種子を付けないようにしています。

宇治市内の小学校では地元の自然について自分たちで学ぶ授業があり、今後はそのような教育の場に巨椋池由来のハスを活用し、現存する巨椋池由来のハスの品種をすべて集め、地域で守っていくことができると考えています。



上：「巨椋の輝」  
下左：「へり基地」  
下右：「請所の本紅」

# 植物と植物文化を保存する

日本植物園協会名誉会員 さくらそう会世話人代表 鳥居恒夫

## 栽培植物の保存がなぜ必要か

美しい花を咲かせる園芸植物は元々、野生植物の中から選抜された個体変異(品種)であり、それを母体として多くの園芸品種が育成された。長い歴史の中ではある時代の人たちの美的観賞眼のレベルがわかる資料となる。一つの園芸品種は基本的には変異を起こさないの、基準を示すものとして意義があるかもしれない。

## 植物・品種の特定

多数ある園芸品種については、個々の品種を特定しなければならない。長い栽培史を持つものでは間違いや混乱も多いため、試作・調査して品種特性を記録し、栽培家からの伝承も参考にして他の品種との違いを見極める。目で見る形態的な観察を基本として品種特性を記録することで、遺伝子による研究も進めることができる。

## 品種名の文化

園芸品種には、その品種固有の園芸品種名(花名ともいう)がつけられる。日本では古くから人(遊女や相撲取)や愛玩動物、茶器などの器物に古典文芸から引用した雅な固有名詞をつけて愛でる習慣がある。文芸とのタイアップは、日本の園芸の著しい特色である。

品種の特定にあたっては、その原典を考察して、字体や読み方を適切に考慮し、品種本体と一体となった文化として伝えなければならない。

## 栽培法の文化

キクやサクラソウ、フジ、ハナショウブなど、観賞方式にのっとった栽培法が確立され、これも日本の園芸の特色とい



孫半斗鉢

ってよい。台所の雑器であった孫半斗鉢は植木鉢に活用され、現在でもサクラソウ作りに最適として残り、使われている。

## 観賞法式の文化

鉢植の梅や盆栽の飾りつけ、桜草花壇、藤棚、花菖蒲の田圃、秋の菊花壇など、植物をより美しく、情趣ある雰囲気



桜草花壇

## 関連する資料の保存

歴史あるコレクションでは、過去の記録や絵図、伝承などは勿論、関係のある歴史的な記述や文芸作品なども記録にとどめておくべきである。江戸時代に版本による本草書や園芸書が多数刊行されたことは、世界的に見て驚くべきこと。ナショナルコレクションを維持するには



古い園芸品種

保存活動は人が行なうものであり、人材を確保養成する事が最も大切。そのためには特定のコレクションの保存というよりも、広く植物好き花好きの人を増やすことが必要で、植物園ファンを糾合した友の会の結成と活発な普及活動を展開し、自由意志での参画をしやすくすることが第一と考

# 新宿御苑に伝わる伝統的な古典菊とキクの展示

## 環境省新宿御苑管理事務所

日本における菊は、古くは中国から伝わり愛されてきました。平安時代には、陰暦の9月を菊月と呼び9月9日を「重陽の節句」「菊の節句」として菊花酒を飲む宴が行われ、邪気を払い、長寿を祈りました。また、単に花の美しさを愛でるだけでなく、各地方でそれぞれの風習や文化などを取り込んで「菊作り」が発展し鑑賞されるようになり、「菊文化」として日本各地に根付きました。また、明治になると菊花が「皇室の紋章」に定められ、より日本人に親しみのある花となりました。なかでも新宿御苑の菊花壇は、一つの様式として完成された皇室苑地時代の展示方法を守り、また、多種多様な日本各地の菊が一堂に見られ、全国でも貴重な存在であり、日本の菊文化を後世に伝えていく上で、重要な役割を果たしています。

新宿御苑の菊は、もとは宮内省により行われていた観菊会の展示を引き継ぐもので、その歴史は、皇室を中心として

菊を鑑賞するために、明治11年に赤坂離宮(当時は仮皇居:現 赤坂御用地)で行われた「菊花拝観」が始まりで、明治13年からは「観菊会」と称されて毎年赤坂離宮で開催され、昭和4年からは観菊会の開催地が新宿御苑になり昭和11年まで行われてきました。昭和24年に、新宿御苑が「国民公園」となり、その年の秋から一般の国民に皇室ゆかりの菊花壇が公開されるようになりました。ちなみに、毎年、赤坂御苑(赤坂御用地内)で行われている皇室の「秋の園遊会」は、この観菊会が現在に至るものです。

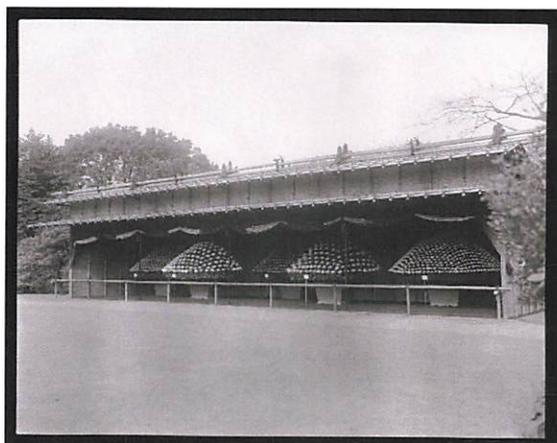
新宿御苑の菊花壇展は、日本庭園を回遊しながら周囲の景観と調和して、菊と庭を楽しめるように花壇の配置や上家(うわや)といわれる建物を設け工夫が凝らされており、菊花だけでなく、それらの総合美も鑑賞するのが特徴であり、現在は、上家内に独自の様式に飾り付けられた7つの花壇と2つの露地花壇が展示されています。

皇室ゆかりの菊花壇展は、毎年11月1日から15日まで開催され、期間中には、例年6万人前後の来園者があります。

新宿御苑での菊の栽培は、当初、赤坂離宮内で栽培されていた菊が、明治37年から一部を新宿御苑でも栽培するようになり、大正14年からは観菊会用の菊栽培をすべて新宿御苑で行うようになりました。

現在、御苑内にある菊栽培圃場では、菊花壇の展示のために、古典菊を中心に大輪種と合わせて約500品種3000鉢程度を栽培しています。また、それらの展示品種の確保のため、育種を継続して行っており、毎年、人工交配して得られた種子から実生苗を育成し2000株程度を圃場内の畑で栽培しています。

なお、古典菊とは、江戸時代(元禄期)から、菊の育種(品種改良)が盛んになり、明治、大正時代にかけて全国でそれぞれ独自の系統、品種群が生じて発展した伝統的な園芸品種を「古典菊」と呼んでいます。



大作り花壇。上は昭和4年撮影、下は現在

## 植物と植物文化を保存する

鳥居 恒夫 日本植物園協会 名誉会員  
さくらそう会 世話人代表

### はじめに

野生植物の保存活動の進展に促されて、栽培植物（主に園芸植物）についても人類の文化として保存するべきという機運が高まり、植物園協会によるナショナルコレクション認定制度が発足したことは画期的な快挙で、関係する方々の尽力に感謝したい。

実を云えば、私は千葉大学の学生であった19歳の頃から、農場にあったウメ、ツバキ、サクラ、カエデ品種の多様な美しさを知り、様々な園芸植物をリストアップすることを始めました。それ以前にも中学生で会員となって始めたサクラソウ品種の収集栽培を通して、このようなものを確実に保存するにはどうしたらよいかという夢を妄想し、子供の頃からの憧れであった植物園の仕事に入った経緯があります。

敗戦時の昭和20年には愛知県の田舎町の小学校1年生で、それから中学にかけて食糧難ではあったけれども、戦後の自由な空気の中で育ち、植物採集をしては押し葉を作り、家の庭では園芸植物を育てるなどに明け暮れました。幸いにも戦災を受けなかったのも、父親が揃えていた植物図鑑類もあり、受験勉強などというものはなかった時代でした。この長い幼少期に植物を繰り返し観察したことで、植物を識別する勘が培われ、野生植物も園芸植物も区別なく楽しく面白いと認識する人格ができたものと思います。

### 栽培植物の保存がなぜ必要か

食用や資源となる植物を保存することは誰にも理解できますが、観賞植物となるとそれは数寄者の道楽という人もあり、野生植物の研究者の中には園芸植物は対象外であるとして関心を持たず、その価値を認識しない人もあるように感じます。

生き物は太陽のエネルギーを根源とし、土と水と空気から植物が作り出す栄養で動物は命を繋ぎ、人類は衣食住の全てにその恩恵を受けるばかりか、瑞々しい緑に潤いを覚え、花を美しいと感ずる心の働きを体得するという高度な文化を築くことができました。この美しいと思う文化の中から、慈愛の心とか芸術というものが生まれたに違いありません。

美しい花を咲かせる園芸植物は、元々野生植物の中から選抜された個体変異で（品種）それを親として多くの園芸品種が育成されました。長い歴史の中ではある時代の人たちの美的観賞眼のレベルがわかる資料でもあります。また絵画や染色など古い美術品は長い年月の間に色彩が薄れ酸化して変色、風化してしましますが、古くから生き続けてきた園芸品種は、現在も当時と全く変らぬ色の花を咲かせてくれるのです。

野生植物は個体変異の集合体である種という集団で捉えられていますが、最初にその種が定められた時に、普遍的な個体が採られたか、特殊な個体であったか疑問が残りますし、長い年月が経つと集団そのものが変異することも考えられます。一つの園芸品種は基本的には変異を起さないのも、基準を示すものとして意義があるかも知れません。

### 植物・品種の特定

保存の対象となる植物、ことに多数ある園芸品種については、個々の品種を特定しなくてはなりません。長い栽培史を持つものでは、その間に間違いや混乱も多く、これを試作・調査して品種特性を記録し、栽培家からの伝承も参考にして他の品種との違いを見極め特定します。最近では遺伝子による研究が盛んですが、現在でもまず目で見える形態的な観察が基本で、この品種特性の調査があつてこそ、遺伝子による研究もできることになるのです。

### 品種名の文化

園芸品種には、その品種固有の園芸品種名（花名とも云う）がつけられます。日本では古くから人（女官や遊女）や愛玩動物、茶器などの器物に古典文芸から引用した雅な固有名詞をつけて愛でる習慣があり、中国の故事や和歌の歌枕などがもととなっています。遊女には源氏物語からの名前がつけられたので、これを源氏名と呼びます。江戸時代の都市で花開いた町人文化には、バックに確とした武家文化があり、さらに中世の王朝文化（公家文化）への憧れがあり、園芸の世界にも浸透・継承され、欧米と異なる特異な文化です。

品種名の特定に当つてはその原典を考察して、字体や読み方を適切に考慮し、品種本体と一体となった文化として伝えなくてはなりません。

陳列の際には品種名を記した名札をつけますが、植物や植木鉢、展示場の雰囲気と調和し、見やすいように、材質や色・大きさ・書体・位置などを吟味しなくてはなりません。

### 栽培法の文化

現在の植物栽培では設備技術ともに人工的なものになってきましたが、100年前にはまだ自然そのものでした。しかし江戸時代でも工夫を凝らして植物を育てる技術は培われ、個々の植物の栽培法を紹介した園芸書も刊行されています。

キクは京都や江戸だけでなく、嵯峨、伊勢、熊本、八戸、大垣などでそれぞれに育成された系統があり、観賞方式にのっとり栽培法が確立され伝えられております。

栽培に必要な植木鉢も、古くには木箱や曲げ物、鮑の貝殻などが使われ、のちに中国渡来や瀬戸焼の鉢もできましたが、たいへん高価な一品製作のものでした。江戸の街では瀬戸で焼かれた陶製の小瓶が、塩壺などの台所の雑器として安く大量に売られており、これに底穴あけて植木鉢に流用しました。口径5寸（15cm）と6寸（18cm）があり、さらに大形の5升入りの水瓶半斗鉢に対して孫半斗鉢（略して孫半という）と呼び、ウメやツツジ、アサガオやキクあらゆる植物を植えて売られていたようです。大量生産の植木鉢ができたのは明治になって西洋から温室鉢が入ってきてからで、それを堅焼きにした駄温鉢は、ポリポットが普及する近年まで使われたことをご存知だと思います。

孫半斗鉢はサクラソウ作りに最適として残り、現在も使われております。それは釉薬がかけられて乾燥し難いので、湿性地産のサクラソウの栽培に適したことと、茶褐色の地味な色調がサクラソウの淡い花色を引き立ててくれるからです。

この鉢は明治以後には焼かれなくなったので、栽培者は様々な窯元に見本を渡して同じような植木鉢をつくりましたが、さくらそう会でも窯元に発注して共同購入をおこなって

きました。サクラソウに限らず植物は植え方と管理次第で、どんな植木鉢でも育てることはできますが、性質に適い見栄えもよい植木鉢はマニアにとっては大切なことなのです。

### 鑑賞法式の文化

鉢植えの梅や盆栽の飾りつけ、桜草花壇、藤棚、花菖蒲の田圃、秋の菊花壇など植物をより美しく、情趣ある雰囲気で見賞する方式は長い栽培史の中で確立されたもので、造園の技術でもあり、日本の園芸の大きな特色と云えます。

花壇と言えば公園で見られるほぼ平面的な植え込みが思い浮かびますが、これは西欧から教わったフラワーベッドという毛氈花壇で、本来の意味からすれば秋の菊花展で見られるような、前面が低く後方を高く配置した境栽花壇的なものを意味します。さくらそう会には江戸時代後期の天保時代から始まった「桜草花壇」が伝承され、遅くとも明治前期の製作と考えられる一棟が存在します。組立式で間口1間奥行き5尺(180×150cm)、細い丸柱、障子の両屋根に庇つきという瀟洒な造りで、5段の棚に33～38鉢を彩りよく配置する飾り方が伝わります。この最古の原形は2018年春の神代植物公園さくらそう展で公開展示しましたが、構造は公開済みで同寸法のもので各地で展示されています。

屋敷の庭に春ごとに組み立てて飾ったもので、広い公園で展示すると随分小さく感じられます。各地のさくらそう展示会で、5段の棚に鉢を陳列するのはこの桜草花壇に倣ったもので、中段を目線にあわせた効果的な陳列法が踏襲されているわけです。

### 関連する資料の保存

歴史のあるコレクションでは、過去の記録や絵図、伝承などは勿論、関係のある歴史的な記述や文芸作品なども記録にとどめておくべきかと考えます。

江戸時代には木版による本草書や園芸書、絵図等が多数刊行されましたが、世界的に見てこれは驚くべきことだと思います。書籍や絵図は本屋が採算を見込んで作るもので、版木に字や絵を彫って紙に摺る技術が高度に発達し、手漉きながら紙を作る技術も発展して大量の紙が安く供給されたことが、大量な出版を可能としました。江戸市民の好奇心は強く、寺小屋の普及によって識字率も高く、大消費都市になっていた京大阪江戸の三都には、買い求めることのできる経済力を持った市民が多数存在したのです。これも江戸文化の特記すべき事実でした。

### ナショナルコレクションを維持するには

植物園はコレクション保存のセンターではあるものの、単独で長く続けることは無理でしょう。多くの園芸植物の保存は、これまで個人の収集家やその集まりである保存団体が行なってきたおり、その協力なしにはできません。植物園も1園だけでは災害などの危険もあり、離れた地域の複数の園と団体とが協力関係を組み、利用者のボランティアを糾合して行なうべきかと思えます。保存植物は消耗品ではなく、保存活動は人が行なうものであり、人材を確保養成する事が最も大切です。そのためには特定のコレクションの保存というよりも、広く植物好き花好きの人を増やすことが第一で、植物園の利用者ファンを糾合した友の会の結成と、活発な普及活動を展開することを提案します。

## 植物と植物文化を保存するために

前代の人たちが麗しいとして選抜し、残してくれた園芸植物は文化財にあたいする。和歌などの歴史的な文芸を起源とする園芸品種名は、植物と一体のもので文化財である。栽培法や鑑賞法も重要な文化財、関連資料や絵図なども保存が必要である。保存する植物は消耗品ではなく、継続して栽培維持されるもの。保存の対象となる植物は、これまで収集家や愛好者の団体によって栽培保存されてきた。社会の混乱期や災害を乗り越えて、愛好者達によって長く伝えられてきた歴史を認識する。植物園は保存のセンターとはなり得ても、愛好者の団体の協力がなければ維持が難しい。それぞれの植物の愛好会や収集家と連携して、収集・交換・保存し、普及活動を行なう。種苗の分譲を受ける時は、単なる提供者ではなく、目に見える植物の研究者と認識する。分譲を受けたからには、立派に育てて維持し、誠意を示すこと。展示会や講習会は愛好会の協力を得て開催するべきで、新しい愛好者の育成につながる。災害回避も考えて、複数の植物園と地域の愛好会が協力関係を持ち、深密な交流を図る。専門的な知識と技術を持つ職員の育成は、最も急がなくてはならない課題である。

## さくらそう会が行なってきた品種保存と普及活動

桜草は江戸荒川の原野に自生する野草を、江戸の人たちが園芸草花に育成した。300年の栽培史があり、営業ではなかったため、多くの品種が伝えられてきた。長い間には維新、震災、戦争があり、多くの混乱が生まれた。整理統一が必要。戦時には栽培も抑制され、絶滅に瀕したが、愛好者達の愛情で残す努力がなされた。少しずつ保存された品種を持寄ることで、桜草園芸の復活が目論まれた。1952年に愛好者による全国組織の「さくらそう会」が発足し活動を開始。余剰種苗を持寄って、新しい会員に配布する普及活動が始まった。日比谷公園で展示会を開催し、残された品種を紹介、美しさを見せた。講習会や見学会を開催、会報を発行して情報の提供と交流をうながす。品種の収集・試作、特性調査を行い、品種と品種名を特定する。保存すべき品種を選び、「認定品種」とすることで、品種の整理・統一を進める。認定品種にもとづく正確な品種苗を配布し、展示会でも正確な名称で表示。認定品種を収録した、品種のカラー図譜の刊行。これで品種の統一が進行する。新しい実生花の評価、選抜佳品とそこから認定品種を選定する二段階評価とする。

### 桜草鉢の製作と購入の斡旋

江戸時代に創作された「桜草花壇」の復元製作、図面と寸法を公開する。

### 鉢やプランター、培養土など多様な栽培法や観賞法の研究と普及

### 植物園との連携 品種の維持・収集協力・展示会・講習会・植え替えボランティアなど

### 品種の同定 各地植物園や展示会・個人宅への出張、切花送付による同定など